

都市近郊田園地域における環境共生型開発のあり方に関する一考察

九州大学	学生会員	高橋 由資
九州大学大学院	正会員	樋口 明彦
九州大学大学院	フェロー会員	太田 俊昭

1. はじめに

福岡県西部の糸島地域は、豊かで潤いのある田園風景が未だ多く残る地域である。近年では、九州大学移転計画の影響により、各地で周辺の景観との調和を無視した農地の大規模な宅地化や、山林の宅地造成等が生じつつある。その状況下で、従来の開発手法に変わり、地域の豊かな田園環境をできるだけ損なわず、増大する開発圧力を吸収して行く新しい環境共生型の開発手法が求められている。本研究では、そうした開発手法の一つとして、里山の山裾に低密度の住宅開発を行うことを提案した。

2. 環境共生型開発モデル

糸島地域の田園風景は、図-1に示すように、主に水田の広がりとそのを取り囲む里山によって構成されている。この風景にとって最も深刻なダメージは、こうした水田の広がりを住宅開発等によって物理的に寸断し、風景の奥行きをなくすことである。糸島地域の里山には、1970年代のオレンジ自由化以降、

経営が成り立たずに放棄された果樹園の後が多数存在しているが、図-2に示すように、これらの「遊休地」を活用して住宅開発を水田から里山の中へ誘導することで、田園景観の保全を試みることができる。写真-1は、ごく少数ではあるが既に糸島地域に存在するこうした環境共生型開発事例の一つを示している。果樹園跡をそのまま利用し、特別な造成はほとんど行わずに、地域の農家の伝統的なデザインを取り入れた建物が作られている。建物の周囲には多数の樹木が植えられ、周囲の山林とよくなじんでいる。このように十分な植栽を施すと共に、低密度にゆったりと住宅を配置することにより、ふもとから見た里山の景観に与える開発のインパクトを最小限に抑えられる。図-3は、このような住宅開発を10～20戸程度の住宅となるように行った場合のイメージを示している。また、図-4はそのうちの戸を拡大したイメージを示している。このイメージで規定している開発のスペックを表-1に示した。

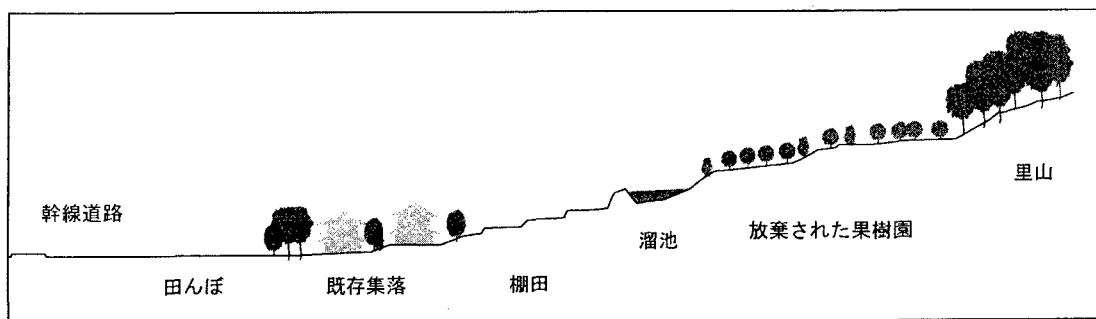


図-1 糸島地域の典型的景観構造

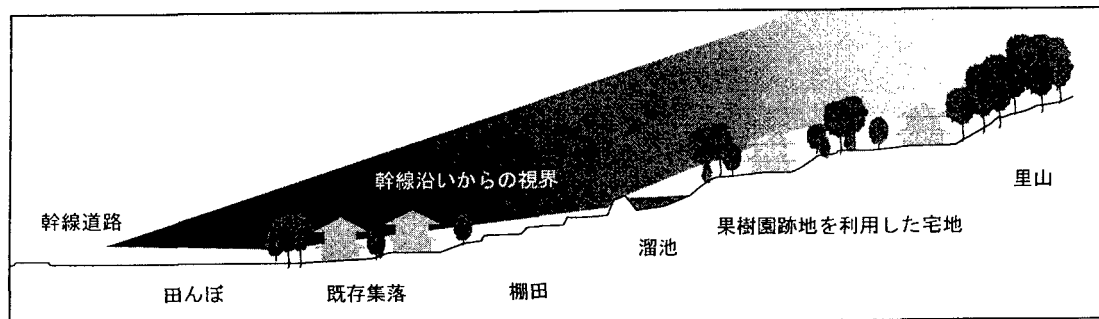


図-2 環境共生型開発を行った場合の景観構造

表-1

用地	里山の中腹、果樹園のゆるい傾斜地
規模	1~2haに10~20戸程度
各戸の規模	
用地	600~1000m ²
建物	木造平屋または2階建て ・ (延べ床 100~150m ²)
庭	全面透水性
緑化率	敷地の30~40%緑化 (高、中木)
取り付け道路	簡易舗装, 幅員4~5m

これは糸島地域で行われている従来型の住宅開発と比較した場合、土地面積で3倍ほどもあり、大変低密度なものであるが、①既存の農家がほぼ同じ程度の規模であること、②不採算な農地あとであるため用地費等を考慮すれば、一般の宅地造成地と比較してきわめて安価であること。③自然に囲まれたゆとりある暮らしを望む人々が着実に増加していること。等を考慮すれば、十分現実的なスペックであるといえる。

3. まとめ

これまで、我が国では、地域性や環境に対する配慮がほとんどされることなく、日本全域で同じような手法や、デザインを用いて住宅開発が行われてきた。今後は、今までの既成概念にとらわれることなく地域の環境特性や風土を十分に考慮した上で、自然環境を保全し共に生きてゆくための開発手法を、地域ごとに模索してゆく必要がある。

本研究では、未だ既成概念レベルであり、コスト等、さらに詰めてゆくことが必要ではあるが、そうした環境共生型開発手法の一例を示した。

参考文献：

中央公論 (平成11年11月号), 中央公論, 新社, 1999, p282-295

志摩都市計画マスタープラン

西山康雄, アンウィンの住宅地計画を読む, 彰国社, 1992



写真-1 開発例

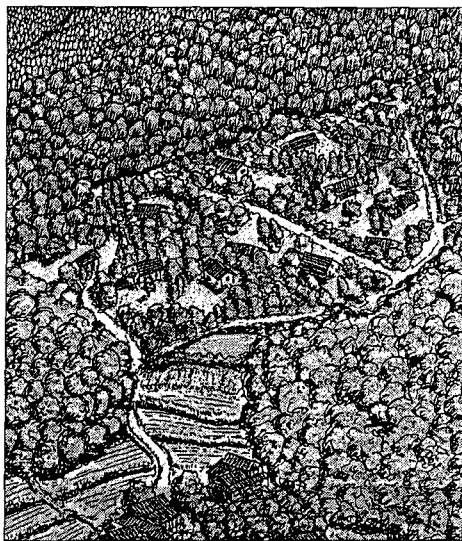


図-3 環境共生型開発のイメージ

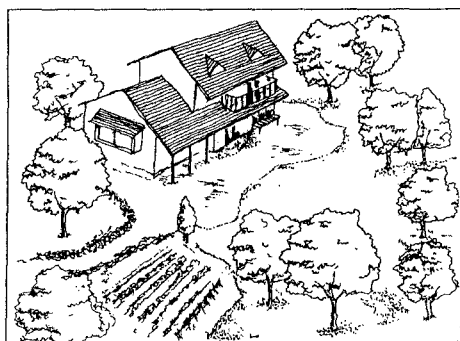


図-4 環境共生型開発のイメージ (2)